

伝承 あすか

第二十号

前何度か拝見した事があり、優雅でありながら力強く、楽しそうで難しい演技だと感じました。

起源は中国とのこと、聖徳太子十四歳に始められたとのこと、由来冊子を拝見すると、これも良くぞこころで調べられ復活されたこと、心からの敬意を感じます。

着実な歩み

明日香村文化協会会長

阪本 薫

文化協会に所属させて頂いてより、伝承芸能保存会の皆様のご活躍を拝見できる機会を得ました。

明日香の響保存会八雲琴の、厳かで清廉な響きは、聞く人の胸に深くしみ入り、心豊かにしてくれます。

明日香南無天踊りは、敬虔な祈りの姿を力強く表現され、演奏、唄、踊りが一つとなり、演技構成にストーリーがあり、この土俗舞踏楽をよくぞここまで復活されたこと、敬意と共に驚いております。

万葉集は短歌、長歌、旋頭歌、と三種の歌体に区別され、四千五百十六首あるそう、高い敷居でありましたが、万葉朗唱の皆様の凛とした朗唱を聞かせていただき、本当に素晴らしいと実感致しました。

飛鳥蹴鞠会のご活躍については以

今や伝承芸能は、明日香村の表舞台において、なくてはならない文化の顔となっております。今日迄研鑽を重ね、偉業を成してこられた、垣内正義様を始めとする歴代会長様、役員様方、協働され研鑽を重ねられる会員全ての皆様に、衷心よりの敬意を捧げたいと思っております。

そして今、育てておられる子供たちが、堂々たる姿で演奏、踊り、朗唱される姿を見ると、とても嬉しく感じます。これで明日香の文化も無事に引き継がれていくであろうと思えました。ご指導される先生方のご苦勞も慮るところであります。

思い起こすと、明日香村の歴史の子供たちへの伝承の一端も、飛鳥京観光ボランティアガイドが担当しています。ボランティアガイドとは、

平成九年六月、第一回養成講座が開催され、来村される観光客に、飛鳥時代の歴史や観光スポットの案内等の目的で募集され、約五か月間で、一日二時間の机上研修と、二、三ヶ所位歩いての实地研修を経て養成講座修了、飛鳥京観光ボランティアガイド証が交付されるのです。第二回募集は翌年、役場職員さんも受講されました。私は聖徳中学で郷土研究班に所属し、又、島庄大字では、平成五年頃から、島庄の寺の元住職であられた網干善教先生に、大字勉強会の講師として三回ほど、先生の暖かいお心で、ご指導を頂きました。この様に歴史になにかとご縁があり、第一回ガイド養成をうけました。当初は不慣れで会社勤めもあり出勤回数も少なく、満足な活動が出来ませんでした。そこで経験や失敗などガイド仲間と話し合い、工夫して改善に務めました。三年ほど経つとガイド依頼も増加し、平成十三年第三回目は村外からも募集されガイド員を補充、それ以後、二、三年毎に養成最近では平成二十八年の第九回目まで続いています。

平成十三、四年頃から学校教育の中で「郷土学習」が始まったよう、学校からの依頼を受け、小学六年生にガイドを練習させるようになりました。観光地六ヶ所を勉強することにより飛鳥時代の歴史や郷土

を理解させるためです。最近では六ヶ所に複数のガイド員が担当し、練習やりハーサルにガイド員の欠員がない様配慮されております。又、観光客への案内日が終ると、直近の父兄会でガイド発表会を催し、心の中に郷土愛が芽生えるように育成されておられます。

中学生は平成二十六年より、英語による観光ガイドが出来るよう準備中とのことで、オリンピックを控え間もなく、石舞台等で外国人を案内する中学生の姿が見られる事でしょう。



この様に「あすか科」や「飛鳥学」の教育が浸透して、文化協会の文化講座に、小学生が受講をしてくれたり、伝承芸能の各部門に生徒さん達が出演し、頑張っておられる姿を拝見した時、着々と後継者が育っていると感じます。伝統ある明日香を、次の世代へ優しく引き継いで行く道筋は、着実に進んでいると思います。教育とは、長い時間をかけて多くの人達の努力により、結果がみえること云うことに、今改めて素晴らしいさを感じます。これからも道のりは長いでしょうが、郷土をよく理解し、郷土を愛する明日香人が、確実に増えていく事を望みます。

最後に、伝承芸能保存会皆々様の、益々のご活躍と、ご健勝をお祈り申し上げます。

八雲琴

八雲琴とわたし

田中 英理子

私が八雲琴と出会って早三年。脇田先生や浦谷先生、西川先生にご指導を受け、何とか「菅搔六段曲」や「飛鳥川」、「奈良の都・春の歌」などの曲を奏でることができるようになり、ますますお琴の魅力を感じる

ようになっていきます。

「八雲琴の響きは、明日香の風土に味を出すものだ。何としても後世に伝えていきたい。」と、山本震琴先生が、それまで口伝されていた曲を音譜に残して下さったと聞いています。その楽譜の写しを初めていただいたときは???でした。縦書きでカタカナ、その横に線が引かれていたり、「レ」とか「リ」とか…間に漢字交じりのひらがなで詩(和歌)が記されています。それまで学校の音楽で目にしてきた五線符の楽譜しか知らなかった私にはびっくり仰天、さっぱり理解できませんでした。でも、震琴先生手書きのその譜面には、五線符の楽譜にはない味があるように思えました。分からないけれど、なんだか温かく、昔の人々の声が聞こえてくるような気もしました。

昨年、お稽古の中で、テープに残されている震琴先生の演奏を聞かせていただきました。震琴先生のお琴の音は、素朴ながら太く、憂いを感じます。お声はなんとも艶やかで、詩に詠まれた情景が心にかんできます。習いはじめのころ、「お琴はあくまでも伴奏で、歌が主なんですよ。」と教えていただきましたが、震琴先生の演奏を聞いてみると、確かにお琴は伴奏なんだと思えてきます。しかしながら、私にとって、「歌

う」ということは大変に難しく、声は出ないし、節は分からないし、戸惑うばかりです。

最近、震琴先生の演奏をお手本にしながら、「芳野曲(よしぬぶり)」という曲をお稽古し始めました。

「みよしのの 耳がの峯に ときなくぞ 雪はふりける 間なくぞ 雨はふりける」

「その雪の ときなきがごと その雨の間 なきがごと 限もちはず 思ひつぞ くる その山道を」

「よき人の よしとよく見て よしといひし 吉野よく見よ よき人よく見つ」

吉野の里で生まれ育った私には、なんとも懐かし、心が揺れる詩です。この詩も、震琴先生がお琴の伴奏をつけて歌って下さっていたと知り、その演奏を聞かせていただくことができ、とてもうれしく思いました。詩の意味を考えながらお琴を奏でていると、遠い昔の幼い頃の私に触れるような気がします。昔の人々も、ふるさとの景色をながめ、心ゆさぶられ、その切なる思いを詩(和歌)に残してきたのでしょうか。お琴をつま弾きながら歌うことで、歌いながら万葉人の心に触れようとするので、自分自身が癒されていくような気がします。「芳野曲(よしぬぶり)」と



いう曲に出会えたこと、これこそ八雲琴が引き合わせてくれたご縁と感謝しています。一昨年、明日香小学校に八雲琴のクラブを設立するお世話をさせていただきました。震琴先生が残して下さった八雲琴の響き。この響きを多くの人に味わってもらえるように、若い人たちに伝えられるように、これからも何らかのかたちでお手伝いできたらと思っています。そのためにも、お琴のことをはじめ詩の意味や背景を学び、お稽古に励んでいきたいと思えます。

平成二十九年年度聖徳中学校総合学習『明日香学』で八雲琴を習った三年生七名の感想文です。(昨年末に提出された分)

お世話になった先生方

聖徳中学校・明日香B分科会

八雲琴 三年生一同

拝啓 師走に入り、寒い日が続いていますが、その後先生方はいかがお過ごしですか。私たちは今、受験に向けて頑張っています。先生方は、いつも優しく八雲琴を教えてください、発表の際には温かく見守ってくださいました。私たちの目標であり、最後の舞台でもあった聖中祭での発表が成功したのも、先生方のおかげだと思っています。

私たちは、二年間先生方に八雲琴を教えていただき、大きく成長できたと思います。

今まで弾くことだけで精一杯だったのが、練習を重ねることでみんなと音を合わせることや、聴く人の心に伝わるように、曲に思いをのせて弾くことを意識できるようになりました。本当にありがとうございます。

何人かは続けていこうと思っているので、今後ともご指導よろしくお願ひします。

敬具

私にとっての八雲琴

森田彩香

私は、小学校中学年のときに八雲琴を始めました。何か習い事をしたかと思っていたところ、友達に誘われたのがきっかけでした。楽器を本格的に習うのは初めてで、すごく楽しくて週に一回ある練習を楽しみにしていました。発表会が近づいたに、一緒に始めた同級生三人で、どうしたらもっとよくなるか、どう



平成30年5月3日 天平祭 平城宮跡

したら聴いている人の心に届くか、を考えて練習しました。

私には、憧れている先輩がいました。その先輩はとても琴が上手で、替手というほとんどの人が弾く主旋律のパートとは違うパートを担当していました。始めて間もないころ、先輩が替手を完璧に弾いているのを見て、私もあんな風になりたいと思い、今まで精一杯練習してきました。

そして、中学二年生になって明日香学の授業でも、八雲琴を選択しました。同級生が二人から七人へ増え、週一回の練習以外にも、集まって教えながら練習しました。今まで教えてもらえばかりだったので、教えるというのは難しいと感じました。

私は二年間替手をつとめました。一人だから、間違えてはいけないというプレッシャーがあり、中学生だけの発表のときは、いつも普段以上に緊張しました。ですが、やり遂げた時の達成感は、今までに感じたことのないものでした。

特にこの二年間で、私は今までにない経験ができました。この経験は私を大きく成長させてくれたと思います。改めて八雲琴をやっていたよかったです。高校生になって、多くの人に八雲琴の魅力を感じてもらいたいです。

八雲琴を習って

松本ひかる

私は、小学三年生のころから八雲琴を習い始めました。始めたときは、同級生は二人だけで、精一杯「次の音をひくんだ!」としか、私は考えていませんでした。中学生になってからは慣れて来て、「この曲のこのリズムに挑戦してみよう。」と考えるようになり、八雲琴のたった二本で奏でる音を弾き手として、多くの人に感じてほしいと思いました。二年生になると学校の明日香学での仲間ができました。八雲琴を弾く同級生が六人になり、七人で習ったことで、いろいろなことに気づかされました。例えば、弾き手や人数によって曲の印象が変わることです。中学生になってから、まわりの音を聴けるようになり、新しい弾き手の音を聴いて気づかされました。だから私は、「自分の琴の音と皆の琴の音をくさず、自分に合わせよう」と考え始め、より良い音を、いろんな人に聴いてほしいと思いました。それから多くの場所、演奏するたびにやりがいを感じます。そして、弾き終わると「楽しかった。」という感じです。

七年間、八雲琴を演奏し続けてきて、いろいろな考えや思いをもつようになりました。中学校を卒業しても続けようと思っているこの八雲琴で、これからもっと多くのことを学

び、その良さを、いろんな音色を多くの人に伝えたいと思います。

感想文 和所愛歩

私が八雲琴を始めたきっかけは、姉の友達に小学三年生のころすすめられたからです。

習い始めは、ツボの位置さえ分からなくて「さくらさくら」という曲を弾くのも、精一杯でした。新しい曲を覚えるにつれて、楽しいという気持ちが増えました。でも、それとは反対にしんどいという気持ちも増えました。けれど、ずっと続けて発信してきて、中学校の明日香学という場で、さらに時間を使って練習をできたことがとてもうれしかったです。

発表をするときも、中学生にならなからは緊張もすべてにはないけれどなくなると、経験はやっぱりすごいなと思います。今でもミスは何回もあるし、歌詞を間違えることだって何回かあります。けれど、何度も演奏して直していったらいいなと思います。明日香学の時間を使っている練習はもうないけれど、高校生になっても、時間をみつけて練習に行きたいです。

そして、同じ所での発表が多いけれど、たくさんの人に八雲琴の存在を知ってもらって、きれいな音を聴き、心に留めておいてもらえたら良いなと思います。八雲琴を始めて六年目

が過ぎますが、まだまだ弾いていない曲もたくさんあります。全部一生懸命頑張っていたらなと思います。

今までをふり返って

平野有紗

私が八雲琴を選んだきっかけが、小学校の時に、友達に八雲琴の楽しさを教えてもらってから、ずっとやってみたいなと思っていたからです。中学二年生の時、総合学習で選択があり、その中に八雲琴がありました。私はその時とてもうれしかったです。お琴を始めたときは、どこにどの音があるのか分からなかったし、楽譜の読み方も分かりませんでした。そんな中、初めにやった曲は「菅搔六段曲(すががきろくだんぶり)」です。一段から六段まである曲です。次に弾いた曲は、「奈良の都」です。連続で弾く音が多いので、慣れるのは大変でした。

その次に弾いた曲は、「飛鳥川」です。飛鳥川は、今までやってきた二曲とは異なり、一番難しかったです。今では、とても楽しく弾けています。

八月には燈花会に出ました。朝から会場に行き、練習をして、発表をする時はとても緊張しました。色々ブニングがありましたが無事に終えることができました。三年生も、続けてお琴をすることになりました。

た。三年生になって初めて弾いた曲は、「月花・月の眺め」でした。歌いながら弾く曲で、慣れないと難しい曲です。文化祭では、「飛鳥川」と「月花・月の眺め」を弾きました。二年生とも音を合わせる事ができたと思います。三年生は、文化祭が最後の大きな舞台だったので、成功できてうれしかったです。

八雲琴は、聴く人の心を和ませることが出来る楽器だと思います。私は、高校生になっても八雲琴を続けていきたいいなあと思いました。

八雲琴 嶋田鈴菜

私は二年生から明日香学として八雲琴を始めました。初めに練習した曲は「菅搔六段曲」でした。今となつては簡単に弾けるようになりましたが、最初は全然弾けませんでしたが、毎週水曜日に練習してだんだん弾けるようになりました。そこから段々難しい曲を練習するようになりました。「飛鳥川」という曲も早い段階から練習し始めた曲なのですが、最初は全くついていけませんでした。後半になるにつれ、どんどんテンポが速くなるので、そこを弾けるようになるまでだいぶ時間がかかりました。でも、何回も発表会を重ねていくうちに、徐々に弾けるようになりました。新しい曲を練習して弾けるようになっていくと、お琴を弾くことが楽しくなりました。



平成30年1月8日 こども達と和のつどい 檀原イオンモール

今年の聖中祭では、「月花・月の眺め」と「飛鳥川」を弾きました。万葉文化館である定例公演会の時より、ずっと知っている人ばかりの前で弾くのは、すごく緊張しました。でも二年目ということもあり、大きくミスすることなく弾けました。私は本当に「八雲琴」をやった良かったと思います。万葉文化館である定例公演会には、たまに近所の人も見に来てくださったりします。



平成30年2月18日 なら100伝統芸能こども文化祭 なら100年会館

これからも、この伝承芸能である「八雲琴」を続けていきたいです。そして後世に伝えていきたいです。

今をふり返って

中本有美

私は、お琴をしてすごく良かったと思います。お琴は難しそうで、自分でできるのかと心配だったけれど、

やってみると楽しくて、できる所がだんだん増えていくと、すごく嬉しかったです。いろいろな所に演奏に行つて、今までしたことがないことをたくさん経験できたのも良かったと思います。

はじめは、見られるのが苦手で、すごく緊張したけれど、やっていくうちに慣れてきて、緊張せずに弾けるようにもなりました。お琴では後輩だったので、上手く弾いている友達を見て、そうなりたいたいと思つたし、すごくかっこいいと思つました。

私は、弾いている途中で絃が切れてしまうと、すごく焦つてしまうけれど、絃が切れても焦らず、最後までみんなを引つ張っている姿を見て、自分ももっと上手く弾けるようにならないと、思いました。明日香学でのお琴は終つてしまふけれど、できるならば、お琴を続けていきたいです。そして、もっとお琴を知つてもらつて、お琴の楽しさをもつと伝えていきたいなと思つました。今度は、教えてもらおうのではなくて、教えてあげられるように上手になりたいです。しばらくはできないけれど、できる時になったら、頑張りたいと思つています。

お琴をやってみて

河合倫江

私はC文科会の八雲琴を選択し、中学二年生になり、明日香学で、

した。私が八雲琴を選択した理由は、何回か八雲琴の音色を聞いて、私も弾いてみたいと思つたからです。八雲琴を弾き始めたころは、なかなか思うように弾くことができませんでした。しかし、今では曲のメロディーを少しづつ覚えていき、何とか弾けるようになりました。八雲琴を弾きはじめ、八雲琴について知らなかったことを、たくさん学べました。私は八雲琴について、全く知らなかったもので、知ることができて良かったです。八雲琴は二本の絃が張られたものであるということも、弾き始めたころに知りました。八雲琴を弾き始めてから、たくさん曲を覚えてもらいました。どのメロディーも耳に残りやすく、弾いていて楽しくなりました。

特に「飛鳥川」という曲のメロディーがよく残っています。

私は部活が土曜日にあつたため、土曜日の練習に行くことができませんでしたが、しかし先生方のおかげで、ひととおりは曲を弾けるようになりました。先生方は私が弾いている途中、弾いているところが、分からなくなると、すぐに教えてくれました。それがとてもありがたかったです。

最初は、全く弾くことができませんでしたが、ひととおりは先生方のおかげで弾けるようになって良かったです。

奈良県立高取国際高等学校 第七回「伝承芸能鑑賞会」

明日香村伝承芸能保存会

会長 岡崎義男

明日香村伝承芸能保存会は平成二十四年六月十八日「伝承芸能鑑賞会」と銘打つて、「八雲琴」「南無天踊り」の二団体が初公演させて頂きました。高取高校の生徒さんは落ち着いた雰囲気の中で、楽しく鑑賞して下さいますし、時期によっては多数の海外留学生が鑑賞して下さいますので、大変演じ甲斐があります。また、「学年全体が集える舞台付きの八角形のホール、整った環境です。今年度は二月一日、実施いたしました。演技終了後、楽器や衣装などの体験活動をしました。担当の先生が鑑賞後の生徒レポートと各場面の写真を沢山お送り下さいました。紙面の関係上三名の生徒さんの感想文を紹介します。

一年生 女子

私は伝承芸能を鑑賞して感じたことは、まず、国際ホールに入ったとき、今まで見たことも無い道具や衣装が目について、昔の伝統芸能はこのように感じて、表現されていたのかなと感じて、とても興味が湧きました。伝統芸能は劇と違って、ナレー



平成30年2月1日 高取国際高等学校
第七回「伝承芸能鑑賞会」国際交流ホール

シヨンのような語りはなかったけれど、踊りや音楽を聞いていたら、内容を想像して、楽しめました。
「探求なら」の授業で観たビデオと明日香村伝承芸能保存会の皆さんが演じてくださった伝承芸能は似ている部分がありました。天つくつなど、知っている伝承芸能を演じて下さっているのを観ていたときは、とても楽しかったです。実際に初めて伝承芸能を鑑賞して、これが伝承芸能として、つたえられているものと改めて感じました。
伝承芸能を鑑賞して、学んだことは、明日香村伝承芸能保存会の皆

さんが、私達の今の世代に伝統芸能を伝えていこうと、練習を積み重ねて、私達のために演じて下さっているのかなあと思うと、伝統芸能は何百年の大昔から受け継がれているのは、すごいことだと思いました。

昔、政治の中心地であった明日香の伝承芸能を、高取国際高校で鑑賞することができて、嬉しかったし、良い経験になりました。体験活動をするには出来なかったけれど、観ているだけでも楽しかったです。また、機会があれば伝統芸能を鑑賞したいなあと思いました。今まで伝統芸能について、興味がなくて授業でビデオをみるくらいでしかなかったけれど、今回初めて伝統芸能を実際に鑑賞したことで、伝統芸能というものがどういふ感じなのかをすべて良かったです。日本の伝統芸能は身近にあるのだと感じました。

一年生 男子

僕は、明日香村伝承芸能保存会の皆さんによる伝統芸能を鑑賞して、最も印象に残ったのは「南無天踊り」です。それはなぜかという、独特のリズムと「天つく、天つく」という頭に残しやすい歌だからです。
それに今まで明日香の伝承をあまり知らない僕にも分かる説明で、その起源はあの有名な歴史書「日本書紀」にあることを知り驚きまし

た。
他にもやってみたいと思ったのは「八雲琴」で、これも発祥は有名な「古事記」でスサノオノミコトが持っていた「天の詔琴」に起源があるというものです。

明日香村伝承芸能保存会の皆さんの奏でた音を聞いたときは、きれいな音だなあと思いました。
僕は今回の伝承芸能鑑賞会を終えて、伝統芸能というのは継承する人たちがいてこそ成り立つものだなあと思いました。

楽器体験には参加しませんでした。太鼓やホラ貝の体験など皆楽しそうにしている、こういう風に伝統は受け継がれるんだなあと思いました。

僕も「南無天踊り」や「八雲琴」を家族やこれから先にできる友だちに話していくなど伝統文化がこれから先も保存されるように行動したいです。それに外国などにも日本の伝統文化が発信していけたら、保存とともに良いことだと思いました。

一年生 女子

初めて明日香村伝承芸能保存会の皆さんによる伝統芸能を鑑賞させて頂きました。
「八雲琴」と「南無天踊り」を見させてもらいました。

「八雲琴」は二本の弦で音階を出

せる楽器で、保存会の皆さんがとても上手に演奏されていて、すごいなあと思いました。私は吹奏楽をしますが、吹奏楽には指揮者がいて、演奏者は指揮を見て、音を合わせるけれど、琴は指揮者がいないから、自分たちでタイミングを合わせないといけないのに、ちゃんと合っていてすごいなあと思いました。私たちの知っていた曲も演奏されていて、昔の曲だけでなく、私たちが知っているような曲もできるんだなあと思いました。

「南無天踊り」は一部から五部までに分けられていて、神様に雨を降らして欲しいとか、雨を降らせて神様に、感謝の気持ちを伝える踊りなど、場面にあった踊りをしていました。衣装も変わったり、楽器を替えたり、歌う人が変わったり、今の時代では無いような、独特な歌詞があったりして、とてもおもしろかったです。公演後の楽器体験では、何人かの生徒や先生が、琴・笛・ホラ貝・太鼓などの体験をしていて、みんな苦戦していました。それを見て、そんな簡単にできる物じゃないんだなあ、思ったのと同時に、それを演奏できる皆さんは本当にすごいなあと思いました。最初はあんまり興味がなかったけれど、演奏や踊りを見て、とても良い経験になったと思いました。

万葉朗唱

万葉集を樂しむ

神田和江

年に一度の屋外講座。五月二十五日に、公民館から明日香村のバスで出発いたしました。五月のさつき晴れを頭に描いて、この日を樂しみにしていましたが、前夜の雨が残ってしまいました。バスも満席となり、講座前の頭慣らしに、岡本先生が作曲した「サンバ DE ツバキ」

古瀬山の つらつら椿 つらつらに
見つつ徳ばな 巨勢の春野を

卷一・五四

と、大合唱し、順調に「サア出発」と走り出しました。澄み切った元気な歌声にまどわされたのか、雨も止み美しい山並みを見せてくれました。今回は山城の国「恭仁京と和東の里を訪ねて」の旅です。

今造る 久にの都は 山川の

さやけき見れば うべ知らすらし

卷六・一〇三七

バスも順調に、木津川のほとりまで着きました。前日来の雨で水かさが増し、近づくのも怖い程でした。恭仁大橋のたもとに広場があり、そこから、山城の風景を眺めることができる。南は当尾山から春日山、北

は三上山から和東の山並み。新緑の山々に囲まれた平野、この地を立派な宮殿にしようと夢見たことでしょうか。先生の熱のこもった美声に、水音がかき消されました。車を気にしながら国道を渡り、いざ目的地の恭仁京跡地へと車で移動しました。

三香の原 久にの京は
荒れにけり 大宮人の
うつろいぬれば

卷六・一〇六〇

咲く花の 色はかはらず
ももしきの 大宮人ぞ
立ち変はりぬる

卷六・一〇六一

わずか三年で遷都された都。整然と整えられたこの地を、地元の方々が、大切に守っている様子がかがえます。そこには立派な「恭仁京大極殿の址」碑が立っています。礎石の上に立って見下ろすと、開けた平地には民衆が小さな集落を作り、時折車が走る、穏やかな土地を為しています。

権力闘争にあけくれた、先人たちは何を思っているのでしょうか。人の世の移ろいの果敢なさを見た思いで、恭仁京跡をあとにした。和東の里へ、重い気持ちをかかえ、茶源の郷へと車は走り出しました。弧を描いた緑の茶畑、雨上がりの稜線も美しく映えました。整備された丘

陵。公園。休日には、人々が心を癒しに訪れるのでしょうか。地元の主婦(恋茶グループ)の手作り弁当「お茶尽くし」をいただきました。昼食時は、一同顔見世の時間、出席された人の中には関東からの方もおられ、楽しい一時でした。念願の安積の陵墓もお参りしました。

我が大君 天知らさむと
思わねば おほにそ見ける

和東仙山

卷三・四七六

あしびきの 山さえ光り
咲く花の 散りぬるるとき

我が大君かも

卷三・四七七

安積の皇子陵墓は、いまいる向かいの小高い山上にある。個人個人でお参りすることになりました。和東川を渡り、二人がやっと思ひ違える程の細い山道をくねくねと登り、ようやく頂上にたどり着きました。

今の時代、藤原氏がもてはやされているが、陰には悲しい物語がある事も、知らねばならないでしょう。又多くの不遇の皇子達が頭をよぎります。ことは遠えど今も昔も、『小さきものは時に流され』まかれて行くのでしょうか、ふとこんな事を考えてしまいました。墓所は緑の茶畑に囲まれ、川の流れが聞こえ、永遠

の安らぎにつつまれいる思いで、手を合わせ下山しました。

浄瑠璃寺へ、国宝浄瑠璃寺九体阿弥陀如来像を拝観し、今回の旅でのいにしえの方々に思いを馳せ、手を合わせました。

一路明日香へと京奈和道を通り、大和三山を横目に見て、明日香に戻り、旅は終わりました。来年も楽しみにしています。ありがとうございます。

恭仁京(くにきょう)

奈良時代の都城の一つ。山背国相楽郡(現在の京都府木津川市加茂地区)宮跡は山背国文寺跡と重複する。

「万葉集を歌う会」

第一木曜日 中央公民館2F
午後一時三十分～三時
(定例公演練習)会費・無料

明日香万葉朗唱講座

主催・明日香村伝承芸能保存会
講師 犬養万葉記念館

館長 岡本三千代氏

第四木曜日・年間十一回(八月無)
明日香村中央公民館二階研修室①
午後一時～二時三十分

当日会費 千円
年一回の村外研修旅行実施

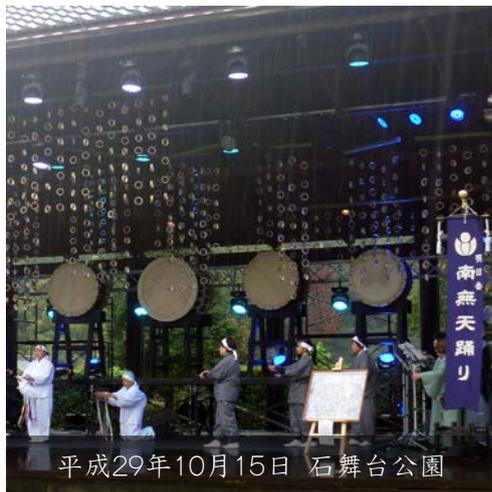
たまゆら(玉響)

広報誌「でんししょう明日香」No.2
(二〇〇八年)に掲載された記事を、バックナンバーとして、元明日香村文化協会会長脇田宗孝氏の承諾を得て掲載いたします。

伝承芸能は秘すれば花

明日香村文化協会会長 脇田宗孝

大和が生んだ日本の古典芸能である能楽は、世阿弥によって集大成され、その奥深さと心の世界を、最も優雅で簡潔に表現していることはよく知られています。世阿弥は『風姿花伝』という花伝書七篇を、三十八歳から書き残し、その後老成した六十二歳(応永三十一年・1421)



平成29年10月15日 石舞台公園

のときに『花鏡』という世阿弥の後期伝書として、芸能の心得を、表しています。

その『花鏡』のなかに、私がいま最も関心のある「離見の見」という言葉がでてきます。世阿弥は、「謡は舞を生み出す根源」といい、舞には「目

前心後」という心得があり、「舞っているときは眼で前を見ながら心は自分の背後におけ」と諭しています。これを平たく言えば「演者は自分の舞う姿を観客席からみているつもりで舞いなさい。」ということでしょう。

上演するひとは、演じる心と、眺める(この同時性を意識し、観客側にある大きな鏡を自分の反射視点と考えること)になります。それを「離見の見」といっています。その意識は「我見」という自己満足や未完成の心境を、「離見」によって修正する心のゆとりを広げることにもなり、「我見」をコントロールできるようになる「見所同心」または「即座和合」という境地が生まれてくるのです。これは上演者と観客が一体となって共鳴し、美的感動の共有と心の交流が盛り上がった熟成した状態を指

すのでしよう。

わが明日香村にも伝承芸能保存会が誕生して六年になり、やっと世間に「明日香に伝承芸能あり」と周知していただくようになりつつあることは、関係者による絶え間ない精進のたまものだと見えています。今はまだ、上演することに集中して「我見」の境地を意識しておられることでしょう。

明日香の伝承芸能は民俗芸能ではありませんが、これからは、「離見」の境地へと魂の昇華と表現の幅をはかり、世阿弥のいう「秘すれば花なり」という幽玄の境地に挑戦していただき、明日香にふさわしい文化財への展開を楽しみにしています。

飛鳥蹴鞠

「飛鳥蹴鞠の日」石舞台地区

日時 平成30年4月7日(土)
12時~13時

「里山あそび広場」2018春

日時 平成30年5月3日(祝・木)
① 11時 ② 13時

場所 高松塚芝生広場

「里山あそび広場」2018秋

日時 平成30年9月22日(土)
① 11時 ② 13時

場所 石舞台地区



平成30年4月9日 飛鳥蹴鞠の日 石舞台公園

「伝承あすか」第二十号

発行 平成三十年五月

明日香村伝承芸能保存会

会長 岡崎義男

編集 明日香村伝承芸能保存会
題字 「伝承あすか」勝川喜昭書